歩行困難をきたした閉鎖孔ヘルニアの一例

三上　隆一　　成富　一哉　　東　大二郎
二見　喜太郎　　有馬　純孝

福岡大学筑紫病院外科

要旨：症例は78歳の女性で，右鼠径部痛を主訴に当院を受診した．来院３日前より経口摂取不良で嘔吐を繰り返しており，血液検査では著明な脱水所見を認めた．腹部所見では，下腹部の圧痛も認め，腹部単純Ｘ線では，著名な小腸拡張像及びニボー形成を認めた．骨盤部 CT では右恥骨筋と右外閉鎖筋の間に円形腫瘤像を認め，閉鎖孔ヘルニアによるイレウスと診断した．手術は鼠径部からアプローチした．開腹すると，右閉鎖孔に小腸が嵌頓しており，Richter 型を呈していた．嵌頓腸管を徒手的に整復し，右閉鎖孔内へ腹膜外よりメッシュ・プラグを挿入し，ヘルニア門を閉鎖した．閉鎖孔ヘルニアは高齢で痩せ型の女性に多く，このような症例で原因不明のイレウスや大腿部痛を認める場合には，本症を疑い骨盤部 CT が必要である．鼠径部アプローチによる手術は比較的低侵襲で，高齢者には有用であると考えられる．また，メッシュによるヘルニア門の閉鎖を腹膜外に行えば，術後感染のリスクは軽減すると考えられる．

キーワード：閉鎖孔ヘルニア，骨盤 CT，腹膜外手術